

動物の神学

1. はじめに

1) 素朴な問い

動物は「天国」（あるいは「浄土」？）に行くことができるか。そもそも、動物には「魂」はあるのか。西洋キリスト教では、伝統的に魂は人間の専有物として考えられることが多かった。

2) 同じキリスト教であっても、西方世界と東方世界とでは、動物観に大きな違いがある。

【参考】ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』におけるゾシマ長老の言葉

兄弟よ、人々の罪過を恐るる勿れ。罪過のただ中にある人間を愛せよ。なぜなれば、これはすでに神の愛にあやかるものであって、地上における愛の頂上にほかならぬからである。ありとあらゆる神の創造物を、全体としても、はたまた各部分としても、なべて等しく愛するがよい。一枚の木の葉、一条の日の光をも、もれなく愛するがよい。動物を愛せよ。植物を愛せよ。ありとあらゆる物象を愛せよ。一切の事物に愛をそそぐならば、そこに神の秘密を発見するにいたる。而して、ひとたびこれを発見したからには、もはやその後は毎日、毎時、毎分、いよいよますます、たえずその認識を深めるようになるであろう。かくてついに、完全無欠な、全世界全人類的な愛によって、この世を光被するにいたる。動物を愛せよ。かれらには神が思想の源と、平安なる喜びとを与え給うたのである。かれらを憤激に駆り立てる勿れ。苦しめてはならぬ。かれらから喜びをうばいってはいけない。神の心に抗してはならぬ。人間は動物の上に立って、傲然と構えるべきものではない。かれらはすべて罪過なき存在であるが、これに反してわれわれ人間は、偉大な稟体を具備しつつも、おのが出現によって大地を腐敗させ、その腐爛せる足跡を、あとにのこしてゆくのである。ああ、嘆かわしいかな！ われわれはほとんど各人みな然りである！

3) (ヘブライ語) 聖書の伝統では、人間と動物の間に根本的な違いを認めない。また、魂の不死性に対しては関心が向けられない。

人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに行く。すべては塵から成った。すべては塵に返る。人間の霊は上に昇り、動物の霊は地の下に降ると誰が言えよう。(コヘレトの言葉 3:19-21)

4) 「動物の神学」の形成、動物のための礼拝の実施(1970年代以降、特に英国・米国において)

動物のための礼拝は、通常、10月4日(アッシジのフランシスの誕生日)あるいは、それに近接する日曜日に行われる。近年は、動物のための礼拝を毎月行う教会も増えてきている。

(例) Episcopal Network for Animal Welfare <http://www.franciscan-anglican.com/enaw/>

2. 人間と動物の関係の諸類型

問い：人間は動物に対し道徳的な責務を負うのか？

1) 人間中心主義（動物に対する人間の圧倒的優位）の立場

- ・ 創世記 1 章 27-28 節

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

※キリスト教では、この箇所から、人間における「神の像」(Imago Dei) をめぐる議論が起きた。「神の像」≒理性≒魂とされた。

- ・ アリストテレス（前 384～前 322）

人間以外の動物は人間のために、従順な動物は食物としての有用性のために、そしてすべてではないにしてもほとんどの野生生物は、食物およびその他の、それらから得られる衣類などの道具という形での補助物資となるために、存在していると仮定しなければならない。そこで、自然は目的がなければ何の役にも立たず、そして役に立たないものは何もないとすれば、自然がすべてそれらを人間のために作り出すのは当然のことである。

『政治学』

※ピタゴラス（前 582?-前 500?）は、菜食主義者であり、弟子たちに動物を敬意をもって扱うように奨励した。彼は輪廻思想を持っていた。小犬がぶたれているところに通りかかったピタゴラスが、「やめろ、それはわたしの友人の魂だ」と叫んだというエピソードがある。後の西洋思想に影響を与えたのはアリストテレスの方であった。

- ・ ローマ帝国の時代

戦争捕虜、犯罪者（迫害期にはキリスト教徒も含まれる）、動物はコロセウムでの「ゲーム」のために用いられた。

- ・ アウグスティヌス（354-430）

動物を殺し、植物を滅ぼすのを差し控えることは迷信の極みだと、キリスト自身が教えている。なぜなら、われわれと獣と木のあいだには何ら共通する権利がないものと判断したので、かれは悪霊どもを豚の群の中に入り込ませたのであり、また実を結ばないでいる木を呪って枯らしたのである。

The Catholic and Manichaeian Ways of Life

※マルコ 5:1-11、マタイ 21:18-22 を参照。アウグスティヌスは「アニミズム」を排除しようとした。

- ・ トマス・アキナス（1225-74）

（申命記 4:19、詩編 8:8、知恵の書 12:18 を引用した後）

ここでは、物言わぬ動物を殺すのは人にとって罪深いことであると言っている人たちの間違いが論駁されている。なぜなら、それらは、神の思し召しによって、自然の序列のなかで、人による利用が意図されているからである。したがって、利用するために、それを殺そうと、それ以外のいかなる方法によろうと、人間にとって悪ではない。このような理由から、主はノアに、(創世記 9:3)「わ

たしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える」と言った。そして、たとえ聖書のいずれかの節が、われわれが物言わぬ動物に残虐であること、たとえば一羽の鳥を雛もろとも殺すようなことを、禁じているように思えることがあったとしても、それは、他の人に対して残虐であるような人の考えを排除する、あるいは、動物に残虐であることを通じて人が人間に残虐にならないようにする、のいずれかであるか、さもなければ、動物に対する侵害は、権利の行使者あるいはその他の人に対する発作的な加害につながるからか、または何らかの意義のためである。

『対異教徒大全』

- ・ ルネ・デカルト (1596-1650)

この観点から、人体は、神の手で作られた機械とみなすことができ、それは比べようがないほどよく調整されていて、それ自体の内に、人が発明できるどのようなものよりもはるかに見事な、数々の動く装置がある。ここでちょっと指摘しておきたいのだが、サルその他の理性のない動物の内部器官と外形とを備える機械があったとしたら、われわれは、それがそれらの動物と同じ性質のものでないことを確かめる手段を持たない。他方、われわれの身体と外形が似ていて、事実上可能な限りわれわれの行為を真似る機械があったとすると、われわれにはつねに、それが真の人でないことを確かめる2つの非常に確実な試験方法があるはずである。第1に、それらは決して、われわれが自分の考えを他の人に表明するときにもいつも行なうようなスピーチや記号を使うことはできない。……第2の着眼点は、機械は、一定のことは、われわれと同じあるいはわれわれのだけよりもうまく行うことができても、それ以外のことでは、絶対的に劣っていることであって、……

『方法序説』

2) 人道主義の立場

動物虐待の防止、弱いものへの慈愛の精神

1824年、アーサー・ブルーム（英国国教会の司祭）が王立動物虐待防止協会（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals, RSPCA, <http://www.rspca.org.uk/>）を設立。キリスト教の慈愛の精神が、動物にまで拡充されることを願った。

3) 動物解放（animal liberation）運動の立場

- ・ ピーター・シンガー

功利主義（最大多数の最大幸福）の視点から「種差別」（speciesism）を批判する。

人間以外の感覚的存在者（sentient being）も最大多数の中に算定される資格を持つと考える。感覚性（sentiency）を有する限り、人間であれ動物であれ、平等な道徳的配慮がなされるべきであると主張する。動物実験の批判。菜食主義のすすめ。

シンガーはユダヤ・キリスト教の人間中心的な考え方を批判する。

4) 「動物の権利」（animal right）論の立場

- ・ トム・リーガン

「固有の価値」（inherent value）。ノーマルな一歳以上の哺乳類を「生命の主体」と考える。

- ・ アンドリュー・リンゼイ（神学者） 「寛大さ」の倫理（弱者の道徳的優先権）

私が示唆したいのは、権利の概念は道徳神学と十分に両立するものであり、それは動物をも含むよ

うに正しく拡張されるのが正しいということである。

『神は何のために動物を使ったか——動物の権利の神学』20 頁。

我々が動物にたいして義務をもっているという道徳的には満足すべき解釈は、ある動物解放主義者によって勧められているような、動物をも同等に考えるべきであるという主張に単に留まってははいられないのである。イエスの人格によって示されている神的愛という考えに基づいて私は次のように提案する。すなわち、弱者と無防備なものは同等なのではなく、より大きな考慮を与えられるべきである、と。弱者が道徳的優先権を持つべきなのである。

同書、64 頁。

3. 動物観と人間観の歪んだ関係——ナチスの先取性と狂気

1933 年、ナチスは動物保護法を定める。この法律の序文では、動物は人間のためではなく、「それ自体のために」保護されると明示されている。また、1938 年の改訂版の第一条には、ドイツの法律は「諸外国のそれとは異なり、動物すべてを保護の対象にする。ペットとその他、高等と下等、人間に役立つか否か、についてはいっさい差別を設けない」と定めている。

反ユダヤ運動の中で、ユダヤ人は類人猿のイメージで描かれることが多かった。類人猿は人類の前段階として蔑まれていた。ナチスには、自然の法則に調和して生きることが理想とされた。自然の法則こそが「神の全能の力」であった。

※問い：ディープ・エコロジスト（生態系中心主義者）や、日本における安易なアニミズム礼賛者は、「人間」社会における差別構造（構造的暴力）の深みを見過ごしてしまっているのではないか？

4. 日本文化・日本宗教の中の生命観

1) 動物と人間の共生から、その崩壊の時代へ

動物と人間の共生を語る昔話や神話は多数存在する（特にアイヌの神話）。人間と動物は会話をし、結婚し、仲間となる。人間が動物を犠牲にしなければ生きていないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていた。

技術力の進展による、動物と人間の「対称性」の崩壊、そして動物の家畜化。

☞ 小原克博「動物からの問いかけ」（「現代のことば」）、『京都新聞』2008 年 10 月 3 日、夕刊

2) 供養

動物（生物）供養：クジラ（山口県・長門向岸寺の鯨位牌及び鯨鯢過去帳）、ヒグマ（アイヌのイオマンテ）、ウナギ、シロアリ、菌塚（曼殊院、大和化成、協和発酵）

動物以外の供養：人形、針、仏壇、パチンコ台、眼鏡、入れ歯

3) 草木国土悉皆成仏、一切衆生悉有仏性

9 世紀頃にはすでに流布していた。

（天台）本覚思想：日本仏教の独自の思想と考えられてきたが、類似のバリエーションは東アジアにおいて広く見られる。日本では中世の文学・芸能・神道理論に影響を与えた。

1980 年代以降、この考え方を日本の代表的な自然観、環境倫理、寛容論と見なそうとする主張が徐々

に強くなり、今日に至っている。

※問い：こうした考えは、真に寛容な思想基盤や倫理規範を提供してきたのか？

4) 実験動物の慰霊祭（実験動物供養）

実験動物供養のはじまり：1917年の九州大学における動物祭が最初か。韓国でも、実験動物供養が行われている（日本統治時代に伝搬）。

※問い：無宗教の動物慰霊祭は可能か？

5. まとめ——動物と人間の新たな関係を模索して

1) 動物に対する「供養」「慈愛」は、キリスト教よりアニミズムや多神教的文化において、いつそう進んでいるのか。社会的弱者（強者の犠牲者）への「慈愛」は、そこに伴っていたのか。

2) キリスト教の「アニミズム化」が求められているのか（エコロジーの神学、動物の神学）。弱者（人間の犠牲者）としての動物・生物への共感的視点をどのように回復することができるのか。

3) 世代間倫理を支える新しい「自然神学」の形成の必要性。

【参考文献】

A. Linzey, *Christianity and the Rights of Animals*, New York: Crossroad, 1987.

A. Linzey, *Animal Gospel*, Louisville: Westminster John Knox Press, 2000.

A. Linzey and D. Cohn-Sherbok, *After Noah: Animals and the Liberation of Theology*, London: Mowbray, 1997.

B. サックス（関口篤訳）『ナチスと動物——ペット・スケープゴート・ホロコースト』青土社、2002年。

P. シンガー（戸田清訳）『動物の権利』技術と人間、1986年。

P. シンガー（戸田清訳）『動物の解放』技術と人間、1988年。

D. ドウグラツィア（戸田清訳）『動物の権利』岩波書店、2003年。

C. バーチ、L. フィッシャー（岸本和世訳）『動物と共に生きる』日本キリスト教団出版局、2004年。

A. リンゼイ（宇都宮秀和訳）『神は何のために動物を造ったのか——動物の権利の神学』教文館、2001年。

現代のことは

こはら
小原 克博



ハリケーン・カトリーナによって、ニューオーリンズを中心に大規模な犠牲者が出たのは二〇〇五年のことであった。ハリケーンのような自然災害は、避けがたく生じる「天災」であるだけでなく、事前の対策や事後の対応が悪ければ、被害を増大させる「人災」の要素も含んでいることを、この被災は世界に印象づけることになった。

それは被災の際のペットの保護である。ハリケーン・カトリーナの際にも、ペットと共に避難した人は多数いたが、避難先でペットの行き場がなく放置されたり、ペットと飼い主が離ればなれになってしまったり、様々な悲劇が生じた。大災害のただ中では人命救助が最優先であって、ペットのこ

動物からの問いかけ

牲を生じさせたことが、新聞などを通じて知られるようになり、人々の意識が変わり始めた。

特に、変化の大きなきっかけを作ったのがスノーボールと呼ばれた子犬であった。増水から逃れるため、人々はバスの上に乗るように誘導されたが、ペットの避難は許されず、警察官によつて子犬は飼い主の子どもから取り上げられた。子どもは「スノーボール！スノーボール！」と嘔吐するまで叫び続けたという。こうした出来事に心を痛めた人々や動物愛護団体が全米的な運動を展開した結果、〇六年、ブッシュ大統領が「ペットの避難と輸送に関する基本法」にサインするに至った。

緊急事態に対応できるよう制度を整えてきている。しかし、家族の一員ともいえるペットの救援に関しては、ほとんど未整備の状況ではなからうか。

他方、犬や猫をはじめ多くのペットが毎日、各地の動物愛護センターに持ち込まれている。この種のセンターは、引き取り手の見つからない動物たちを致死処分することを仕事の一部としているが、どのセンターの報告を見ても、処分件数が増加していることに驚かされる。人間の身勝手さが生む犠牲である。かつて、動物と人間の間には、力の不均衡に調整をもちたらずために様々な知恵が働いていた。動物が人間と会話を交わしたり、時には化かしたり、また結婚したりする昔話を思い出すこともできるだろう。特にアイヌ

には、動物を決して粗末に扱ってはならないことを教える物語があふれている。人間が動物を犠牲にしなければ生きていけないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていたのだ。

大量の動物を家畜化し、痛みも感謝も感じることなくスーパーで動物の肉を買いあさる現代人は、人類史上、もつとも野蛮な段階にあるのかもしれない。人間が引き起こした地球温暖化の最初の犠牲になるのも動物たちである。我々は、物言えぬ動物たちの声を「聞く」力を回復しなければならぬのではないか。人が人であり得ているのかを測る大切な指標を、動物たちは与えてくれているのだから。

(同志社大教授・キリスト教思想)